

昭和48年5月

平城宮発掘調査出土木簡概報(九)

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(一)

この概報には、さきに公刊した『平城宮発掘調査出土木簡概報八』（昭和46年）以後、平城宮跡およびその周辺地域から発見された木簡を『平城宮発掘調査出土木簡概報九』として収録する。

また、今回は、奈良国立文化財研究所が、昭和44年以来継続して行なってきた藤原宮跡および飛鳥地域の緊急発掘調査によって発見された木簡を『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報一』として収録する。

以下、木簡の形態分類・凡例などがかかげ、つぎに平城宮と飛鳥・藤原宮のそれぞれについて木簡の出土地域ごとの状況を述べ、釈文をかかげる。

木簡の形態分類

6011型式 短冊形
6015型式 短冊形で、側面に孔を穿ったもの。
6019型式 短冊形と推定できるもの。
6021型式 小型矩形のもの。
6022型式 小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

6031型式 長方形の材の両端左右に切りこみをいれたもの。

6032型式 長方形の材の一端の左右に切りこみをいれたもの。

6033型式 長方形の材の一端の左右に切りこみをいれ、他端を尖らせたもの。

6039型式 長方形の材の一端の左右に切りこみがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

6051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

6059型式 長方形の材の一端が尖って他端の形態が不明のもの。

6061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

6065型式 ある種の用途をもつと推定される木製品に墨書のあるもので、その用途が判然としないものの。

6081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

6091型式 削屑

凡例

釈文は出土遺構ごとにかかげる。最上段に出土地点（アルファベット・数字）、つぎの段に形態による型式分類番号（本概報では千位の6を省き、三ケタで表わす）をそれぞれ記した。「」が二個あるものは表裏に記載のあることを示し、「」の中にさらに「」のあるものは同一面に別筆のあることを示す。

平城宮出土木簡

木簡出土の地点と状況

第77次調査 (GABRIX)

この調査は、昭和四十八年一月から同四月までの間、平城宮の推定第一次大極殿とこの南面回廊およびその中央門を確認する目的で実施した。

調査地域は舌状にのびる丘陵の末端にあり、大規模な土盛整地を行なっている。発見した主要な遺構は、南面中央

門、回廊、楼風建物などである。門、回廊などの建物遺構は土盛整地層の上に建設され、周囲に敷き詰められている。バラスには三次にわたる敷き替えが認められる。

発見した門の基壇は、東西約28・5m、南北約17m、南・北面にそれぞれ階段をもつ。柱位置は削平されて痕跡がみられないが、地覆石の据付痕跡、凝灰岩の散乱状況からみると凝灰岩による壇上積基壇であったと考えられる。回廊基壇は幅約12mある。この北面では玉石敷の雨落溝があり、さらに外側にバラス敷がある。礎石据付けの根石によって、梁行7m、桁行4mの回廊であることがわかる。

その後、これを改作して、門の東約15mの位置に楼風建物(SB7802)を増築する。建物は東西5間(22m)、南北3間(12m)の東西棟総柱建物である。妻と側柱列を掘立柱、内部を礎石柱とし、桁行を回廊の柱間にそろえている。この時、回廊などの北縁は拳大の礫で敷き替えられ、北側に排水用の溝ができる。

最後の改作は、門・回廊・楼風建物が存続している間に、基壇石を積み替え、礫敷を埋め、バラス敷に替えた。

奈良末・平安初期になって、門の北約15mのところに、正殿風の東西7間(22m)、南北4間(13m)の掘立柱建物

が建てられる。

木簡は楼風建物（SB7802）の掘立柱拔取痕跡から多量の遺物とともに発見された。この楼風建物の掘立柱掘方は一辺約3m、深さ約2.5mもある大規模なものである。拔取穴の土の堆積は、下方に遺物を含まない白灰色砂質土があり、その上方部に土器・木製品・瓦などの遺物をふくむ層があり、それらはいずれも楼風建物の廃絶時に投棄されたものであった。一六個中一一個の柱拔取穴から木簡が発見されたが、いずれも同じような遺物の出土状況であった。発見された木簡は総計二四三点である。このうち年紀・年号をもつものに「天平勝宝五年」・「天平勝宝」の二点があり、土器などの伴出遺物の型式編年もこれまでの知見からこの時期におさえて矛盾はない。したがって、楼風建物およびこれと関連して中央門・回廊などは天平勝宝五年頃に廃絶したものと考えられる。内容的には、「衛門府」（二点）、「授刀所」、「大殿守」、「衛士養（物銭）」など一連のもの、また人名を書き上げた類の木簡が多いことなどがとくに注目される。木簡の性格および発見された遺構、とくに中央門および楼風建物との関係については今後の課題とした。

第80次調査（GBFKⅩ）

この調査は、昭和四十七年十一月六日から同十二月十二日まで法華寺阿弥陀浄土院跡推定地内に含まれる左京二条二坊十坪の西北隅で行なった。

調査に先だち、発掘区北方約20mの地点で調査用電柱を埋設したが、その際、天平宝字二〜五年と推定される坤宮官関係の木簡一点が出土した。発掘部分が僅少で遺構の性格は明らかでないが、一坊・二坊の坊間大路の東側溝にあたるのではないかと推測される。

この調査の結果、奈良時代の建物六・柵二・溝七及び平安時代以降の土壙三その他を検出した。奈良時代の遺構は二期にわかれ、最初掘立柱東西棟の建物四・柵があり、北端と西端にそれぞれ東西溝・南北溝が存在したが、後それらの建物にかわって、二棟の掘立柱建物（一棟は後に礎石建物に改められた。）が設けられたと考えられる。溝・土壙及び遺構上面からは、緑釉丸瓦・埴をはじめ須恵器・土師器・瓦などの遺物が出土した。奈良時代後半のものが多く、遺構の時期区分を明確にできるような遺物はみられない。木簡は、発掘区西側中央の南北溝に近い小土壙から、

断片である。

石万昌

右四人 月 日 申時

十八

大殿守四人右

殿四人
 右五人

6ABR-SB7802

天平勝寶□年□□□^(廿)二日合

丸子

丸子豐宅丸子豐額丸子友注丸子友依

應修理正倉

右

肥後國山鹿郡
妙法蓮華

矢称万品所事珠女来

「欲處事」

来
□
□
□
□

解申

九 夫天大 九子口口 口子刀千
九子廣宅 九子大田而 九子豐宅宅

宅宅宅宅宅

殿守二升

☐

100

英
田
□部

肥後國合志郡鳥嶋余ノ

[illegible]

HC 35 091 「鼓遣如件今以状□□」

HC 35 091 □□□所牒畱書察」

HE 31 081 「進上飯□六斗□□」

HE 33 081 「進衣」

HE 33 081 □□^(勝)寶五年正月」

HE 33 081 □□^(年)正月廿八日」

□」

HE 31 081 「□月廿七日付牛甘」

HE 33 081 □□廣道人成 大□」

□^(五)人 常食急 □ 廿五日」

HE 33 011 「牛甘 真豆 廣道 大食」

「合四人」

HE 31 081 「牛養 金麻呂 東□」

HE 35 051 「益□ 若豆」

HE 33 081 「荒嶋 合二人」

HE 31 011 「玉□鳥嶋 □□」

「右三人」

HE 33 091 「日久米□虫」

HC 35 011 「番散位石村角」

HE 33 081 「春部氣万呂」
(裏面ニ墨痕アリ)

HE 33 031	HE 31 039	HE 35 032	HE 33 032	HE 35 032	HE 31 081	HE 33 081	HB 35 081	HE 33 081
湯坐連野守	早部五麻呂	衛門府	衛門府	授刀所 小竹七十	物部長万呂物部人万呂物物	喻 昨万呂 廣	馬甘赤	早部久治良

HE 31 031	HC 27 039	HB 27 081	HE 35 091	HE 35 091	HE 35 091	HE 27 031	HE 35 039	HE 33 039
丹後國竹野郡木津郷紫守マ与曾布五斗	伊豆国田方郡葉妻郷戸主秦忌	荅志郷奈豆米三	大部	矢田部	粟田木才	山東人	春日部國勝	縣馬養

久米郡衛士養 (物)
 (錢力)
 六百文

都
々
美

大麻 □ 大麻

𨔵𨔵𨔵𨔵𨔵𨔵

二二

(其力)
其其其其其其

SADE BOSTON

坤宮宮縫殿出米參斗 右薪買

遣如件
五月廿八日
舍人池後小東人

BN
39
091
十九本

B0
42
081

會會會會會會會會會會會會會會會

(裏面ニ墨痕アリ)

飛鳥・藤原宮出土木簡

木簡出土の地点と状況

第1次調査 (GAJHE 昭和44年12月～同45年5月)

第1次調査は宮域の南辺で行い、かつて日本古文化研究所の調査で検出され、未報告になっていた朝堂院南門と推定される遺構を再確認し、朱雀門の存否を確認しようとした。検出した主な遺構は、再検出の推定朝堂院南門SB500と、その南北を走る東西溝SD501とSD502で、朱雀門は存在しなかったことが明らかとなった。木簡は南溝SD501から二七点出土した。

第2次調査 (GAJHE 昭和45年7月～同11月)

第2次調査は大極殿跡の東南地域について行なった。検出した主要な遺構は礎石を有する建物・池・溝・礫敷・柵などである。礎石建物SB530は、東西棟で、朝堂院回廊の位置から約30 m北で検出した。この建物はかつて日本古文化研究所の調査で検出されており、第2次調査とあわせて桁行六間・梁間四間の礎石建物であることが判明した。木

簡は桁行柱列の東から五本目の柱穴の埋土中から一点検出したが断簡で判読し難い。

第4次調査 (GAJHE 昭和46年11月～同47年5月)

第4次調査は大極殿東方区域で行い、藤原宮の遺構としては溝一二条、溝にともなう構築物一、柵一、礫敷、土壇等を検出した。その他の遺構としては、古墳時代の溝七条・掘立柱建物一棟・瓦器をともなう溝等を検出した。

木簡は藤原宮の溝SD105 (四十一点) とSD850 (七点) とから計四九点が出土した。

SD105 SD105は、内裏東外郭を限る柵SA865の東約5 mにあつて、奈良県の調査 (奈良県教育委員会『藤原宮』参照) で発見された溝SD105の上流にあたっている。溝は幅約5 mで、堆積層は三層にわけられるが、最上層は平安時代の堆積層で、木簡は、第二層以下の藤原宮期の層から計四二点出土した。木簡の土中での保存状態は良好であるが、断片が多く、文意の明らかなものは少い。

SD850 SD850はSD105のさらに東約17 mのところにあつて、奈良県の調査 (同前) で発見された溝SD101につながる可能性があるが断定は今後の調査結果にまちたい。溝

は三層にわかれるが、木簡は最下層から計七点出土した。いずれも保存状態は良好ではなく、判読できるのは一点のみである。

第5次調査 (6A1L区 昭和47年3月～同8月)

第5次調査は藤原宮の西辺、西面中門以南の官庁地域で行い、南北棟の建物一棟SB1100A・BとSB1110A・B、および井戸SE1105を検査した。SE1105はSB1100A・BとSB1110A・Bとによってはさまれた空地にうがたれており、両建物の存続期内に使用されたものである。木簡は井戸の掘方第二層と第三層とから計三点出土した。井戸の掘方の埋土は三層に分けることができるがすべて一時期にうめられたものである。

坂田寺跡調査 (5B5T区 昭和47年9月～同48年1月)

坂田寺跡の調査は祝戸国営公園の建設に伴う事前調査として、推定坂田寺跡の北辺にあたる地域で実施した。検出した主な遺構は池一、建築物一、掘立柱列二、溝七条である。遺構の年代は七世紀と八世紀にまたがり、大別して四時期にわけられる。木簡は、池SG100、土壙SK080、溝

SD051から計七点出土している。

SG100 SG100は発掘区中央にあつて、深さ1mの池で東岸は石積みをきざいつている。北端と西端は発掘区の外にあつて、池の東南部分のみを検出した。木簡は計三点出土した。池の存続時期は第一期七世紀前半に属する。木簡の他に、土師器に「知」と線刻したものがある。

SK080 SK080は、発掘区中央部分にある土壙で木簡一点を出土した。第二期七世紀後半に属する。

SD051 SD051は発掘区西部分を南北に走る石組の溝で、北端は東流する東西溝(SD050)に合流する。木簡は計三点出土したが判読できるものはない。時期は第三期八世紀前半に属する。その他墨書土器として「知識」「南」「金」「真」等と記したものを三〇数点検出した。

GAJH-SD501

JP
38
032

東^(才)
十六

勤了

JP
38
033

勤了

JE
39
081

花

JQ
39
091

未品

JQ
39
091

道道道

GAJF-SD105

DM
62
081

戸主^(才)
少^(才)
初位^(才)
下長谷^(才)
マ首^(才)
万品

奴一

DN
62
081

得文^(前)
別戸造^(前)
日

DO
63
081

長田

収大^(考)

DP
62
059

十九斤八両

DP
62
081

寸白戸

DP
62
081

比六又乃乎由比四

二又

DQ
63
081

月廿四日

GAJF-SD850

DR
56
081

外徒徒



GAJL-SE1105

AU
28
051

マ奈波手

俵

AU
28
081

宮未呂又



SBST-SG100

FK
47
031

十 斤

FK
47
031

十 斤

FK
47
031

十 斤

SBST-SK080

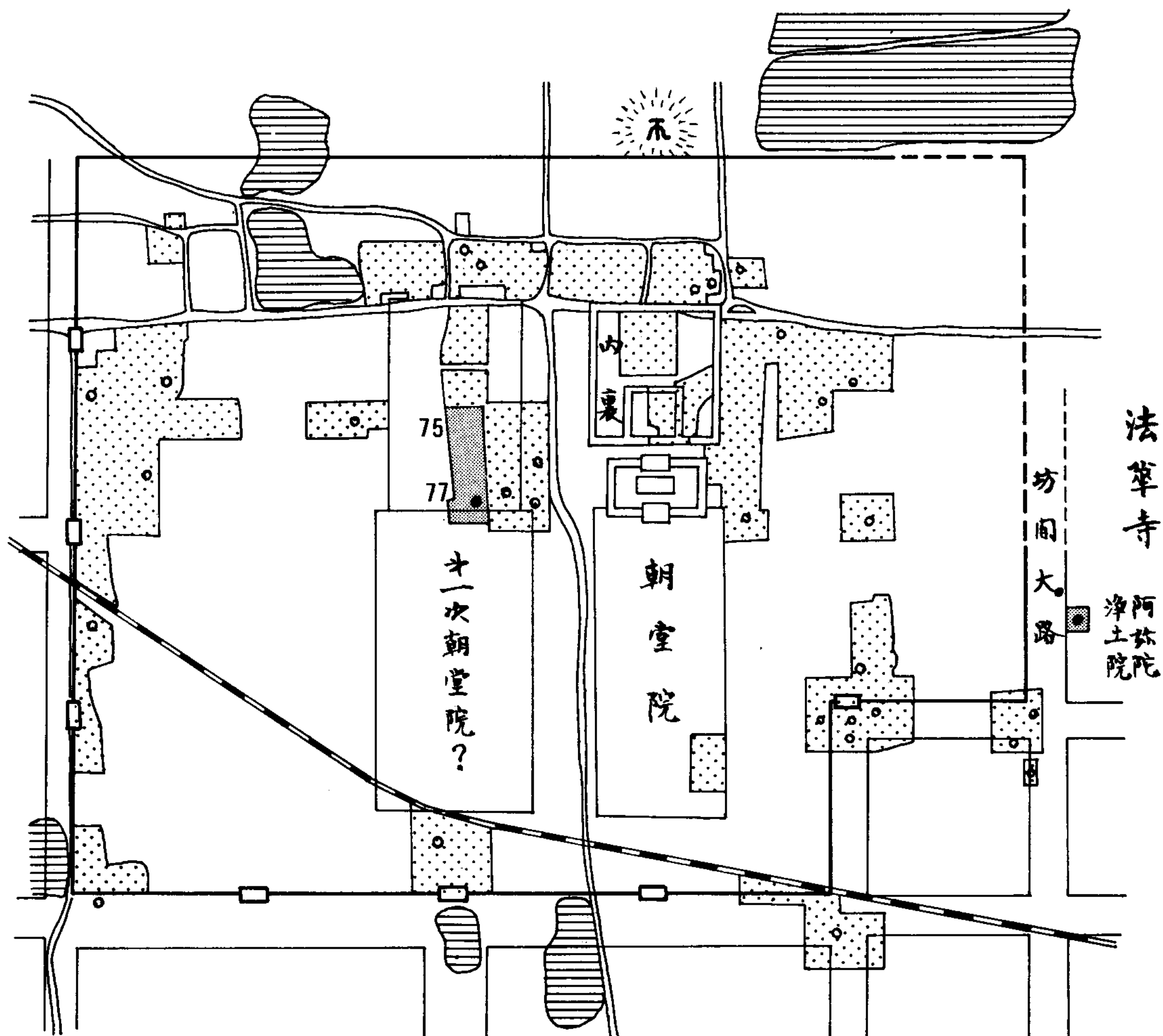
FK
51
081

賀年



平城宮

木簡出土地點略圖



- 既出土地點
- 今年度出土地點
- ▨ 既發掘地
- ▩ 今年度發掘地

藤原宮

木簡出土地点略図

